

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：12102
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：20H01332
研究課題名（和文）個人識別技術と可読的身体の諸相に関する身体史的研究 近代的管理技術の由来と展開
研究課題名（英文）Emergence and Expansion of "Readable Body" in the Modern World: A Historical Approach to the Origin of Biometrics
研究代表者
村上 宏昭（Murakami, Hiroaki）
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：70706952
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,490,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は指紋法をはじめとする、生体に基づく個人識別技術を身体史の観点から考察しようとしたものである。4年間の共同研究の中で、途中新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより研究活動を停滞を余儀なくされたことがあったものの、以下の成果を上げることができた。

（1）研究期間内に研究代表者および共同研究者が発表した学術論文は計38篇、研究発表は計30本、図書は計14冊である。

（2）上記のほかに、令和6（2024）年度に本研究の成果として『生体管理の近代史：個人識別技術と身体の情報化』（明石書店）を刊行予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本共同研究の学術的意義と社会的意義はそれぞれ以下の通りである。

（1）学術的意義：従来の個人識別技術の歴史研究は、警察史・犯罪史研究の領域にとどまってきた。だが本研究は、この技術の基礎にある可読的身体に着目し、その歴史的由来と展開を考察することで、さらに広い射程を得た。

（2）社会的意義：現代社会においては、バイオメトリクス技術が日常生活の隅々にまで浸透している。それゆえ当該技術を歴史的視座から眺めることで、私たちの社会の歴史的特質を解明できる。

研究成果の概要（英文）： This study was conducted to examine biometric identification technologies, such as fingerprinting, from the perspective of "history of the body". During the four years of the study, we were forced sometimes to halt our research activities due to a pandemic of COVID-19, but were able to achieve the following results.

(1) During the research period, the principal investigator and collaborators published a total of 41 papers, 31 presentations, and 14 books.

(2) In addition to the above, "Biometrics in History: Personal Identification Technologies and Informatization of the Body" (Akashi Shoten) is scheduled to be published in 2024 as a result of our study.

研究分野：西洋近現代史

キーワード：History of the Body

1. 研究開始当初の背景

【犯罪問題】21世紀に入って以降、個人識別技術に関する歴史研究が進展しつつある。その嚆矢となったのが、Caplan/Torpey (eds.) [2001]とCole [2002]である。前者は近世から現代までのヨーロッパ統治権力が実践してきた市民管理の諸相を考察した論集であり、19世紀の人体測定法や指紋法等も警察権力による犯罪者管理のツールとして論じている。後者は指紋法を軸としつつ、写真鑑定から人体測定、DNA鑑定まで、犯罪捜査における個人識別技術の発達過程を跡づけたもので、犯罪史・警察史研究の一環として位置づけられる。

渡辺[2003]は人類学の観点から、生体に基づく個人識別技術、特に1880年代に開発された人体測定法の特異性を骨相学や頭蓋学にまで遡って考察しているが、ここでも当該技術はその開発動機から、もっぱら犯罪者の同一性を確定するツールと位置づけられている。またCourtine et al. [2006=2010]は、19世紀の犯罪人類学における生来性犯罪者説と結びつけながら、指紋法や遺伝子検査が犯罪を予示する生物学的指標の探索ツールとなった諸事例を挙げている。このように初期の研究はおしなべて、個人識別技術を「犯罪」という、市民社会の周縁領域と結びつけて論じてきたと言ってよい。

【植民地主義】個人識別技術の代表的存在である指紋法は、元来19世紀後半の英領インドで開発されたものである。だが、このヨーロッパ市民社会のもう一つの周縁である植民地の問題に関しては、上記の諸研究はいずれも付随的に言及する程度で、考察の中心に据えることはなかった。植民地主義という主題は、個人識別技術の歴史研究では、ようやく2010年代以降に中心的なテーマとして設定されるようになったと言える。

たとえばBreckenridge[2014=2017]は、南アフリカを「生体認証国家」と規定し、植民地時代以来の指紋法を中心とする統治システムを考察している。また高野[2016]は、満鉄の労務管理や満洲国の国民登録における指紋法導入の試みを追跡することで、近代日本の植民地主義における統治技法として、生体に基づく個人識別技術を位置づけたものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、今日の生体認証技術に体现されている「可読的身体」(legible body)の諸相を身体史の観点から考察し、現代世界に遍在する西洋の身体の歴史的位相を解明することを通じて、歴史研究の新領野を開拓することにあつた。

近年、生体認証技術が日常生活に浸透したことで、歴史学でも個人識別技術、特に指紋法など生体に基づく個人識別技術の研究が進展している。それらが当該技術の開発過程や使用の実態(犯罪者管理や植民地支配等)に目を向けてきたのに対し、本研究はこの技術が依拠する「身体」の歴史的特異性に着目することで、単なる技術の歴史を越えた新しい視座の確立を目指した。すなわち、西洋近代において個人識別(生体認証)技術の開発を可能にしたより広い歴史的コンテクスト、つまり身体を何らかの情報の集積と捉え、それを可読化しようとした種々の試みに焦点を当てることで、「可読的身体の歴史」という未踏の領野を切り拓こうとしたのである。

3. 研究の方法

以下では、本研究の「対象」と「方法」を区別して論じる。

対象：個人識別技術が依拠する特異な身体とは具体的にいかなるものか。本研究はその理念型を「情報としての身体」ないし「可読的身体」と規定し、以下の内容を持つものとした。

【身体のアークイブ化】西洋近代が開発した人体測定法と指紋法には、情報の①記録と②保管の仕方に共通の特徴がある。前者は身体の各部位、後者は指先の隆線という違いはあるが、いずれも規格化された分類方式に従って生体情報を記録する(①)。また採取した大量の情報を同方式に沿って分類することで、特定情報の迅速な検索・照合を可能にする(②)。個人識別技術が志向する身体とは、このように分類・収納が可能な「情報としての身体」に他ならない。

【生命の情報化】人体測定法や指紋法は、元来19世紀の犯罪問題から開発された技術である。だがそれらを支えた身体観は犯罪問題の領域に限定されない。たとえば20世紀の生物学における認識論的転換にも同一の身体(生命)観が見られる。すなわちDNAの二重らせん構造の発見(1954年)以降、生命は旧来の力学ないし物理学の言語ではなく、メッセージ・プログラム・コード等々「情報」の言語で語るべきものとなった(Canguilhem [1968=1991])。その結果、今日のゲノム研究が塩基配列をデータとして読み解くように、生命はそれ自体、紙媒体でも印刷・製本され、棚に収納可能な情報という存在になった。

この「情報としての生命」という観念は、19世紀末の人体測定法や指紋法が依拠していた身体観の系譜に連なるものである。またそれは可視的(visible)身体という、もう一つの近代的身体観とは異なる系譜に属すると見るべきである。すなわち個人識別技術の身体は、一望監視施設(パノプティコン)が志向する身体、独房の中で視線に晒されながら規律化される身体とは別の、

情報として読み解かれる可読的 (legible) 身体の系譜に属する。

方法：本研究は、個人識別技術それ自体に現れる可読的身体の様態に加えて、それ以外の諸相も考察した。その際メンバー各自の専門に従い、可読的身体の起点、可読的身体の展開、身体植民地化の三つの研究班による分掌体制の下、以下のように研究を進めた。

氏名	区分	研究内容 (括弧内は担当の研究班)
村上宏昭	代表	全体統括。20 世紀ドイツの衛生博覧会における可読的身体の展示 ()
磯部裕幸	分担	帝政期ドイツ・アフリカ植民地における感染症罹患原住民の身体管理 ()
昔農英明	分担	現代ドイツの移民管理と EU 指紋データベース「ユーロダック」の活用 ()
高林陽展	分担	19 世紀後半イギリス臨床医学における身体健康状態の数値化 ()
津田博司	分担	20 世紀オーストラリアの先住民に対する骨相学的身体測定調査 ()
堀内隆行	分担	20 世紀前半南アフリカにおける移民の指紋捺捺政策と反指紋運動 ()
宮本隆史	分担	英領インドの監獄制度における囚人の身体管理と指紋法の導入 ()
紀 愛子	協力	西ドイツの遺伝学における「遺伝する身体」の変容と断種論の盛衰 ()
高野麻子	協力	近代日本の指紋論と血液型論にみる可読的身体の個人性と民族性 ()

このように本研究は、2 名の研究協力者を含めて計 9 名で行われた。可読的身体の起点では、西洋近代の臨床医学で芽生えた**健康の数値化 (可読化)**の動向を考察した (高林)。可読的身体の展開では、指紋採取 (昔農・高野) と公衆衛生 (村上・紀) の問題を基に、「治安」と「健康」の管理における可読的身体の様相を考察した。身体植民地化では、考察対象として英領インド (宮本)・南アフリカ (堀内)・独領アフリカ (磯部)・オーストラリア (津田) の四植民地を設定した。前二者はそれぞれ指紋法が最初に開発された地域と、指紋法が統治の中核となった地域である。後二者はいずれも先住民の医学的管理ないし骨相学的調査が実施された地域で、個人識別技術以外の西洋的身体 (可読的身体) の拡散様態を観察するのに好適である。

4 . 研究成果

本共同研究の成果は、2024 年度に明石書店から論集『生体管理の近代史：個人識別技術と身体の情報化』として刊行予定である。本論集の概要は以下のとおりである。

本論集は三部構成で、序章と終章を除いて全 9 章からなる。まず第一部の 3 章は、可読的身体の歴史的由来やバイオメトリクス以外で見られるその諸形態を考察する。可読的身体の前提にあるのは、真理の認識よりも管理の効率性のほうに至上の価値を置く「規格化する視線」である。この視線は 17 世紀の博物学を淵源とするものだが、19 / 20 世紀の工業化時代を通じて社会全体に広がっていった。

第 1 章 (村上担当) は旅券制度や客観性概念、そして諸種の人体測定 (骨格・体重・体温計測) を手がかりに、この視線の系譜と軌跡とを辿っている。旅券の歴史で見られた身体諸類型 (可述的身体・可視的身体・可読的身体) は、科学や行政における三種の客観性 (共同主義的客観性・機械的客観性・規格的客観性) に対応している。規格化する視線はこのうち第三の類型に属するが、それは身体の個性性を問う個人識別技術 (個人志向) に限るものではなく、むしろ元来、身体正常性を問う人類学・医学・生理学の研究手法 (集団志向) に由来するものだった。

第 2 章 (高林担当) は近代イギリスにおける体温計の販売・消費という観点から、この規格化する視線が社会に普及していくさまを跡づける。いうまでもなく体温計も計測尺度の規格化を前提とした技術である。この技術はすでに 19 世紀半ばには開発されていたが、それが特に社会に広がる契機となったのが、第一次世界大戦末期のスペイン・インフルエンザだった。疫病への恐怖に駆られて人びとは体温計測に熱中し、さらにまた薬局店の販促戦略や国家による販売規制が、そうした体温計需要をますます昂進させたのである。

もちろん規格化されたのは体内の温度だけではない。第 3 章 (研究協力者として途中から参加された北村陽子氏担当) はドイツの事例を中心に、X 線の被ばく許容量の基準値策定をめぐる医療従事者たちの諸動向を扱っている。19 世紀末にレントゲンが X 線の発見を報告した直後から、その有害性は医療関係者の間で認識されてはいた。ところがどの程度の被ばく量が人体にとって許容範囲なのか、その閾値の設定をめぐる各国の思惑が衝突し、国際的な標準化 (規格化) は遅々として進まなかった。それが最終的に達成されるのは、ようやく第二次世界大戦後の 1953 年であった。

続く第二部の 3 章は、それぞれ犯罪者・遺伝性疾患患者・移民 (難民) という、近代市民社会で「反社会的」と見なされた身体に対する管理の諸事例を考察する。

第 4 章 (梅澤担当) はフランスの文学作品を参照しつつ、犯罪者の識別法が可視性から可読性に移行した時期を探る。先述のようにベルティオン方式は、犯罪者の身体情報を数値化した点で、その管理の仕方を大きく刷新するものであった。だがそれは、可視性に立脚する捜査方法に即座に取って代わったのではなく、むしろベルティオン自身の認識ではあくまで従来型の目視による捜査を補完するものでしかなかった。犯罪捜査の重心が目に見えて可読的身体へとシフトするには、指紋法の登場を待たなければならなかった。

なお先述のように、遺伝情報もまた可読的身体の一類型である。それゆえ第 5 章 (紀担当) では、遺伝学者ハンス・ナハツハイムを事例として、戦後西ドイツの遺伝学と、それに依拠した優生思想が扱われる。第二次世界大戦後、遺伝学の大要職を歴任したナハツハイムは、ナチ期の優生

思想を変わず信奉していた人物でもあった。すなわち科学的に遺伝性疾患の発症が予想される者を断種するばかりか、遺伝登録簿の制度を創設し、「劣等遺伝子」保有者を国家が管理することまで提唱していたのである。

現代では移民や難民もまた「危険な他者」として表象され、その移動の管理・規制が行われやすい存在である。第6章(昔農担当)は現代ドイツを事例として、EUにおける難民申請者の指紋データベース(ユーロダック)の運用とその問題性を論じる。2015年にケルンで起こった大規模な性的暴行・窃盗事件をめぐる報道は、アラブ系やアフリカ系に対する人種主義的偏見がドイツで根強く残っていることを明らかならしめた。一見中立的な生体認証技術は、実はそうした偏見にもとづく移民・難民の社会的排除を助長する機能を持つのである。

ところで先述したように、生きた身体に対する管理の視線は西洋世界の内部にのみ向けられたわけではなく、植民地の統治実践においても必要不可欠なものだった。そこで第三部では、各々の植民地世界における生体管理の諸相が考察されることになる。

現代インドの生体認証システムは、植民地統治時代とまったく同一とはいえない。第7章(宮本担当)では、19世紀の植民地統治という歴史的文脈から、当時のインドにおける個人識別技術導入の意義を考察する。それによれば、指紋法や(ほとんど知られることはなかったが)足跡識別法など当時の個人識別技術は、従順な臣民の身体を管理する目的で使われたわけではない。むしろこの技術は法的論理(法の支配)というより、犯罪部族と目された集団の武力による平定という、軍事的論理(平穏化)で活用されたものだった。

なお南アフリカは、指紋法がその生まれ故郷インドよりもはるかに積極的に統治の技法として活用された地域であった。だがそれは単に「インドからの道」の延長にあるわけではなく、この地域独自の歴史的背景もあった。第8章(堀内担当)は南アフリカにおける医療・警察制度の整備に目配りしつつ、インド・中国系移民を標的とした指紋法の諸実践を論じている。ただ20世紀初頭には、指紋採取による生体管理の方法は技術上の制約が大きく、その実用的価値が理解されずに中止に追い込まれたことも多々あった。

続いて第9章(磯部担当)は熱帯医学という、それ自体西洋植民地主義の産物である分野に焦点を当て、それがハンセン病(らい病)を「非西洋的」疾患として表象していく過程を論じる。たしかに古来西洋世界でもらい病は知られていたが、19世紀後半のらい菌発見を機に、この病気はそれまでにない新たな様相を呈することになる。すなわち感染症という定義づけと、それにそぐわない拡散の様態から、アフリカ系住民や中国人の生活様式で感染リスクが高いとされる要因が次々と列挙され、その是正が叫ばれるようになったのである。

[参考文献]

- Breckenridge, Keith, *Biometric State*, CUP, 2014. (邦訳 2017)
- Canguilhem, Georges, *Etudes d'histoire et de philosophie des sciences*, Vrin, 1968. (邦訳 1991.)
- Caplan, Jane/Torpey, John (eds.), *Documenting Individual Identity*, PUP, 2001.
- Cole, Simon, *Suspect Identities*, HUP, 2002.
- Csiszar, Alex, "Bibliography as Anthropometry", *Library Trends*, 62-2, 2013.
- Courtine, J.-J. et al. Identifier, Courtine (ed.), *Histoire du Corps*, III, Éditions du Seuil, 2005. (邦訳 2010)
- Corbin, Alain et al. (ed.), *Histoire du Corps*, 3 tomes, Éditions du Seuil, 2005-2006. (邦訳 2010)
- 高野麻子『指紋と近代』みすず書房、2016.
- 渡辺公三『司法的同一性の誕生』言叢社、2003.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計38件（うち査読付論文 19件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Hiroaki Murakami	4. 巻 42
2. 論文標題 Tuberculosis on Display. Tuberculosis Travelling Museums in Wilhelmine Germany	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 German History	6. 最初と最後の頁 37-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 村上宏昭	4. 巻 275
2. 論文標題 書評：原田昌博『政治的暴力の共和国：ワイマル時代における街頭・酒場とナチズム』名古屋大学出版会	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 西洋史学	6. 最初と最後の頁 87-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 村上宏昭	4. 巻 681
2. 論文標題 ドイツの性病展覧会と啓蒙の医学：第一次世界大戦前夜の性病撲滅運動	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 立命館文学	6. 最初と最後の頁 109-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 森本慶太	4. 巻 21
2. 論文標題 1940年代前半スイスにおける観光研究機関の成立 戦後の展開に関する予備的考察	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 パブリック・ヒストリー	6. 最初と最後の頁 42-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森本慶太	4. 巻 276
2. 論文標題 紹介 「森田安一著『スイスの歴史百話』」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 西洋史学	6. 最初と最後の頁 99-99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本隆史	4. 巻 49
2. 論文標題 英領インドの文明化の使命と監獄改革：北西州における監獄行政の導入と展開	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 言語文化研究	6. 最初と最後の頁 131-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本隆史	4. 巻 6
2. 論文標題 植民地インド史の翻訳：サイイド・ハーシミー・ファリーダーパーディー『インド史』（1920-22年）を読む	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 外国語教育のフロンティア	6. 最初と最後の頁 117-132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本隆史	4. 巻 317
2. 論文標題 書評：金子勝著『イギリス近代と自由主義 近代の鏡は乱反射する』（2023年1月 筑摩書房）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 生活経済政策	6. 最初と最後の頁 38-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 昔農英明	4. 巻 3381
2. 論文標題 世界への視座：ドイツ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Umezawa Aya	4. 巻 47
2. 論文標題 La psychiatrie et la litterature. La nuit est mlumiere (1949) d'Etienne De Greeff	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本フランス語フランス文学会中部支部論集	6. 最初と最後の頁 49-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 梅澤礼	4. 巻 28
2. 論文標題 トクヴィルの刑罰思想	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 フランス哲学・思想研究	6. 最初と最後の頁 85-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Umezawa Aya	4. 巻 21
2. 論文標題 Du crime passionnel au feminicide. A propos de l'affaire Chambige	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Criminocorpus	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Umezawa Aya	4. 巻 -
2. 論文標題 Le monde bipolaire et son avenir. Le Sang bleu (1885) d'Hector Malot	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Bulletin Annuel de la Societe de la Langue et Litterature Francaises du Chubu	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀内隆行	4. 巻 69
2. 論文標題 「下からの歴史」からグローバル・ヒストリーへ チャールズ・ファン・オンセレンの南アフリカ犯罪史研究をめぐって	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 中央大学文学部紀要 史学	6. 最初と最後の頁 89-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀内隆行	4. 巻 -
2. 論文標題 [書評] 山本めゆ著『「名誉白人」の百年 南アフリカのアジア系住民をめぐるエスノ - 人種ポリティクス』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 秋田魁新報、他23紙 (共同通信社配信) -	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Umezawa Aya	4. 巻 45
2. 論文標題 Le monde bipolaire chez Hector Malot autour du Mariage de Juliette et Une belle-mere (1874)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本フランス語フランス文学会中部支部研究論文集	6. 最初と最後の頁 55-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Umezawa Aya	4. 巻 42
2. 論文標題 Raynal et Lacenaire, deux poetes prisonniers des annees 1830 : Le double langage du pouvoir	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Les Lettres francaises	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Umezawa Aya	4. 巻 45
2. 論文標題 Le monde bipolaire chez Hector Malot autour du Mariage de Juliette et Une belle-mere (1874)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本フランス語フランス文学会中部支部研究論文集	6. 最初と最後の頁 55-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本隆史	4. 巻 5
2. 論文標題 植民地インドの教科書における過去の表象：ムハンマド・イクバル&ラーラー・ラーム・ブラシャード『インド史』（1913年）を読む	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 外国語教育のフロンティア	6. 最初と最後の頁 315-329
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本隆史	4. 巻 48
2. 論文標題 批評するアーカイブ：カピール・プロジェクトとウェブサイト「驚異の街」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語文化研究	6. 最初と最後の頁 153-173
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本隆史	4. 巻 20
2. 論文標題 19世紀のアンダマン社会：ムハンマド・ジャアファル・ターネーサリー『驚異の歴史：黒い水』より	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 印度民俗研究	6. 最初と最後の頁 3-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本隆史	4. 巻 5 (1)
2. 論文標題 デジタル時代の研究者アーカイブとその系譜	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 デジタルアーカイブ学会誌	6. 最初と最後の頁 82-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀内隆行	4. 巻 5
2. 論文標題 警察と国家モデルのグローバル・ヒストリー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 フェネストラ 京大西洋史学報	6. 最初と最後の頁 13-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 磯部裕幸	4. 巻 856
2. 論文標題 人類は感染症といかに向き合ってきたか? (4) 近代医学と社会の分断：「アフリカ」が問うもの	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 60-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村上宏昭	4. 巻 1010
2. 論文標題 総力戦の時代と兵士の性感染症問題：第一次世界大戦期ドイツの性病対策	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 59-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村上宏昭	4. 巻 13
2. 論文標題 バイOMETRICSの身体：個人識別技術と可読的身体の諸相	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ゲンヒテ	6. 最初と最後の頁 43-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 村上宏昭	4. 巻 79/80
2. 論文標題 近代ドイツの人口問題に見る継承と変革：少子高齢化と民族の持続可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 史境	6. 最初と最後の頁 95-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 磯部裕幸	4. 巻 13
2. 論文標題 感染症と「生体管理」：ドイツ植民地におけるハンセン病対策	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ゲンヒテ	6. 最初と最後の頁 86-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 磯部裕幸	4. 巻 1004
2. 論文標題 「制度」としての医師・病院・患者：歴史学的「医学史」の成果と課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 41-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 磯部裕幸	4. 巻 1006
2. 論文標題 書評:水野祥子『エコロジーの世紀と植民地科学者：イギリス 帝国・開発・環境』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 61-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀内隆行	4. 巻 129
2. 論文標題 アフリカ（2019年の歴史学界 回顧と展望）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 308 - 310
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 昔農英明	4. 巻 11
2. 論文標題 「人道的統治」と難民の階層化：ドイツと日本の比較から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 難民研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 35-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 昔農英明	4. 巻 -
2. 論文標題 [書評] クラウス・バーデ編集・増谷英樹監訳『移民のヨーロッパ史』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 昔農英明	4. 巻 13
2. 論文標題 EU・ドイツにおける難民・非正規移民の管理と市民・難民の抗議運動	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ゲンヒテ	6. 最初と最後の頁 65-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 紀愛子	4. 巻 42
2. 論文標題 戦後ドイツにおける不妊手術に関する法規制の変遷	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 西洋史論叢	6. 最初と最後の頁 47-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 紀愛子	4. 巻 13
2. 論文標題 戦後ドイツにおける遺伝学と生体管理：1950-60年代における断種論を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ゲンヒテ	6. 最初と最後の頁 76-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高野麻子	4. 巻 13
2. 論文標題 生体認証技術と身体管理：識別・分類・意味づけの暴力をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ゲンヒテ	6. 最初と最後の頁 55-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高野麻子	4. 巻 47
2. 論文標題 生体認証技術の発展と未来：認証される「私」とは誰なのか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 世界思想	6. 最初と最後の頁 66-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計30件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 森本慶太
2. 発表標題 第二次世界大戦期スイスにおける国民向け観光事業の展開
3. 学会等名 2023年度東西学術研究所第15回研究例会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Morimoto Keita
2. 発表標題 A Comparative History of Social Tourism: Cases from Switzerland and Japan
3. 学会等名 Kansai University and KU Leuven Joint Workshop on Historiography
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 森本慶太
2. 発表標題 ソーシャル・ツーリズムの構想と国際的普及 1940年代スイスにおける議論を手がかりに
3. 学会等名 政治経済学・経済史学会2023年度秋季学術大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 森本慶太
2. 発表標題 1940年代スイスにおける「ソーシャル・ツーリズム」構想 戦後への展望
3. 学会等名 第27回ワークショップ西洋史・大阪
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 磯部裕幸
2. 発表標題 『人種主義の歴史』をめぐって ドイツ史からの応答
3. 学会等名 第32回 西日本ドイツ現代史学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Miyamoto Takashi
2. 発表標題 A Genealogy of Kala Pani: Indian Convicts and the Idea of Transportation
3. 学会等名 HINDOWS International Symposium: Currents of Metamorphosis across the Indian Ocean
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宮本隆史
2. 発表標題 英領インドにおける監獄の失敗：囚人管理と強制的ネットワーク
3. 学会等名 日本南アジア学会第36回全国大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宮本隆史
2. 発表標題 東京大学デジタルアーカイブと学生運動資料
3. 学会等名 冷戦期日本の学生運動とデジタルアーカイブ（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宮本隆史
2. 発表標題 「第一次独立戦争の闘士」の形成：ムハンマド・ジャアファル・ターネーサリーによるテキストの「誤読」の歴史
3. 学会等名 第1回 HINDOWS文学研究会「文学と戦争」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 昔農英明
2. 発表標題 ドイツのムスリムとユダヤ人の関係性からみる移民問題の現状
3. 学会等名 イスラム信頼学シンポジウム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 昔農英明
2. 発表標題 ドイツの移民政策の概要
3. 学会等名 NPO法人特定非営利活動法人国際活動市民中心
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Umesawa Aya
2. 発表標題 Entre la lumiere et l'ombre. Les femmes hors-la-loi chez Hector Malot
3. 学会等名 Les femmes des lumieres et de l'ombre. Les femmes hors-la-loi
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Umesawa Aya
2. 発表標題 L'argot chez Lacenaire. L'identite tiraillee
3. 学会等名 Argot(s) et identite(s). Comment les varietes peripheriques de la langue contribuent-elles a la construction de l' identite?
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 梅澤礼
2. 発表標題 トクヴィルの刑罰哲学
3. 学会等名 日仏哲学会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 村上宏昭
2. 発表標題 ゲルゼンキルヘン・チフス裁判（1904年）：疫病をめぐる科学と司法
3. 学会等名 第73回日本西洋史学会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 村上宏昭
2. 発表標題 「周縁」の身体史：西洋近代と病氣・犯罪・植民地の生体管理技術
3. 学会等名 第72回日本西洋史学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 昔農英明
2. 発表標題 現代ドイツにおける難民・非正規移民の出入国・滞在管理 生体認証に焦点して
3. 学会等名 「オーストラリアにおける「ポートピープル」の脱/安全保障化をめぐるポリティクス」研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 昔農英明
2. 発表標題 生体認証技術と人種主義 現代ドイツにおける移民管理の事例
3. 学会等名 第72回日本西洋史学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 津田博司
2. 発表標題 オーストラリア先住民をめぐる憲法改正運動 2023年国民投票の視点から
3. 学会等名 歴史人類学会第44回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Umezawa Aya
2. 発表標題 L'affaire Chambige et "le crime passionnel"
3. 学会等名 Workshop : la litterature et le feminicide
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Umezawa Aya
2. 発表標題 La folie penitentiaire et la litterature des annees 1840
3. 学会等名 ACEF-XIX
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Aya Umezawa
2. 発表標題 Mutation du pouvoir dans le contexte carceral: les destins de Raynal et Lacenaire, deux poetes prisonniers des annees 1830
3. 学会等名 NCFS "Power/Pouvoir" (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 梅澤礼
2. 発表標題 対立から和合へ エクトール・マロの『青い血』（1885）
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会中部支部大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 津田博司
2. 発表標題 旧イギリス帝国植民地における共和制論争 - オーストラリアの事例を中心に
3. 学会等名 日本西洋史学会第71回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 磯部裕幸
2. 発表標題 岐路に立つ「コッホの処方」 ドイツの植民地主義とマラリア対策
3. 学会等名 日本植民地研究会 第29回全国研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森本慶太
2. 発表標題 観光業からみたドイツ語圏の近現代史 大衆化をめぐる葛藤
3. 学会等名 東北学院大学ヨーロッパ文化総合研究所公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 村上宏昭
2. 発表標題 近代ドイツの人口問題に見る継承と変革
3. 学会等名 歴史人類学会第40回記念大会シンポジウム「継承と変革：歴史学と人類学の視点から」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Takayuki Horiuchi
2. 発表標題 19th and Early 20th Century Policing in the Cape Colony
3. 学会等名 African Studies Association (USA) Virtual Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 堀内隆行
2. 発表標題 警察と国家モデルのグローバル・ヒストリー
3. 学会等名 シンポジウム「世界史における国家形成・地域形成」(金沢大学ボトムアップ型研究課題「国家・社会をめぐるコミュニケーションの諸相の歴史的解明」)(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 紀愛子
2. 発表標題 ナチ・ドイツにおける強制断種と被害者への戦後補償
3. 学会等名 ジェンダー史学会シンポジウム(招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計14件

1. 著者名 磯部裕幸	4. 発行年 2023年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 320
3. 書名 ドイツ国民の境界 : 近現代史の時空から (分担執筆)	

1. 著者名 森本慶太	4. 発行年 2023年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 232
3. 書名 西洋史の扉をひらく 通史とテーマ史でたどる古代から現代 (分担執筆)	

1. 著者名 森本慶太	4. 発行年 2023年
2. 出版社 関西大学出版部	5. 総ページ数 184
3. 書名 スイス観光業の近現代 大衆化をめぐる葛藤	

1. 著者名 宮本隆史	4. 発行年 2023年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 88
3. 書名 アーカイブのちから : 世界は足跡に満ちている (分担執筆)	

1. 著者名 梅澤礼	4. 発行年 2023年
2. 出版社 光文社	5. 総ページ数 296
3. 書名 犯罪へ至る心理 エティエンヌ・ド・グレーフの思想と人生	

1. 著者名 磯部裕幸	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 378
3. 書名 論点・東洋史学：アジア・アフリカへの問い158（分担執筆）	

1. 著者名 宮本隆史	4. 発行年 2022年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 200
3. 書名 インド文化読本（分担執筆）	

1. 著者名 宮本隆史	4. 発行年 2022年
2. 出版社 みすず書房	5. 総ページ数 280
3. 書名 デジタル時代のアーカイブ系譜学（共編著）	

1. 著者名 堀内隆行	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 378
3. 書名 論点・東洋史学 アジア・アフリカへの問い1158 (分担執筆)	

1. 著者名 吉澤 誠一郎、石川 博樹、太田 淳、太田 信宏、小笠原 弘幸、宮宅 潔、四日市 康博	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 378
3. 書名 論点・東洋史学：アジア・アフリカへの問い1158	

1. 著者名 堀内 隆行	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 194
3. 書名 ネルソン・マンデラ：分断を超える現実主義者 (リアリスト)	

1. 著者名 村上 宏昭	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 356
3. 書名 「感染」の社会史：科学と呪術のヨーロッパ近代	

1. 著者名 秋田 茂、脇村 孝平	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 392
3. 書名 人口と健康の世界史（磯部裕幸「眠り病と熱帯アフリカ：近代医学の描く『文明』と『自然』」）	

1. 著者名 金澤 周作、藤井 崇、青谷 秀紀、古谷 大輔、坂本 優一郎、小野沢 透	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 340
3. 書名 論点・西洋史学（堀内隆行「植民地と近代／西洋」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	磯部 裕幸 (Isobe Hiroyuki) (10637317)	中央大学・文学部・教授 (32641)	
研究分担者	森本 慶太 (Morimoto Keita) (20712748)	関西大学・文学部・准教授 (34416)	
研究分担者	宮本 隆史 (Miyamoto Takashi) (20755508)	大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・講師 (14401)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	昔農 英明 (Sekinou Hideaki) (20759683)	明治大学・文学部・専任准教授 (32682)	
研究分担者	高林 陽展 (Takabayashi Akinobu) (30531298)	立教大学・文学部・准教授 (32686)	
研究分担者	津田 博司 (Tsuda Hiroshi) (30599387)	筑波大学・人文社会系・助教 (12102)	
研究分担者	梅澤 礼 (Umezawa Aya) (50748978)	明治学院大学・文学部・准教授 (32683)	
研究分担者	堀内 隆行 (Horiuchi Takayuki) (90568346)	中央大学・文学部・教授 (32641)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 La littérature et le femicide (La Société japonaise de langue et littérature françaises)	開催年 2022年～2022年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------